

# 新生児行動よりみた脳障害児早期発見の試み

慈恵医大小児科

前川喜平，横井茂夫，加藤二葉

## 目 的

新生児期における脳障害児の早期発見，ことに silent neurological abnormalities の発見。

## 対象及び方法

昭和57年度に慈恵医大小児科に入院した新生児20名で，胎児アルコール症候群（1名），胎児ヒダントイン症候群（3名），甲状腺機能低下症（2名），新生児仮死，けいれん（4名），SFD（5名），早産児（2名），精神分裂病の母親より出産した新生児（3名）である。これらの新生児につき，哺乳から次の哺乳までの状態を，10秒毎にビデオ同時記録で観察，Brazelton新生児行動評価法による評価，哺乳リズムの観察，新生児の神経学的診察などを最低1回，最高5回おこなった。

## 結 果

### (1) 甲状腺機能低下症（2例）

新生児スクリーニングで発見された症例で，神経学的診察，精神運動発達になら異常を認めない。ところが哺乳間の state は睡眠の割合が異常に多いことと，哺乳のリズムに非常にムラがみられた。また治療後では state の改善がみられた。

### (2) Fetal hydrantoin 症候群（3例）

典型例をのぞき一般の神経学的診察では明確な異常がみられないにも拘らず，state の異常，哺乳リズム不良，新生児行動の異常が認められた。ことに出生後数日以内に著明に認められた。

### (3) 精神分裂病の母より出生した新生児（3例）

Withdrawal syndrome を示した1例以外は新生児の神経学的診察，哺乳リズムなどで異常は認められなかった。ところが新生児行動評価では interacting process に関する行動が特に悪かった。これは分裂病のため母子間の接触がすくないためと思われたが，母親の病状が改善された10日頃より接触が増加するにつれ徐々に改善された。普通の新生児にくらべ母子間の成立に時間を要するようである。

### (4) 満期SFD（5名）

最初は哺乳力が悪く state 観察でも寝たきりで，decrement や interacting process が悪いが経過と共に state，哺乳，新生児行動も改善されていた。改善のスピードが早い程，予後良好と考えられる。

### (5) 新生児けいれん（4名）

一般の神経学的診察に加え，哺乳力，state 観察，新生児行動がその後の予後判定にある程度有用であった。

## 結 語

従来の新児の神経学的診察に加え，state の観察，哺乳リズム，新生児行動の評価が脳機能不全の診断に有用であることが判明した。今後この方法を更に簡便化，実用化することにより，脳障害児の早期診断がより容易におこなわれると考えられる。

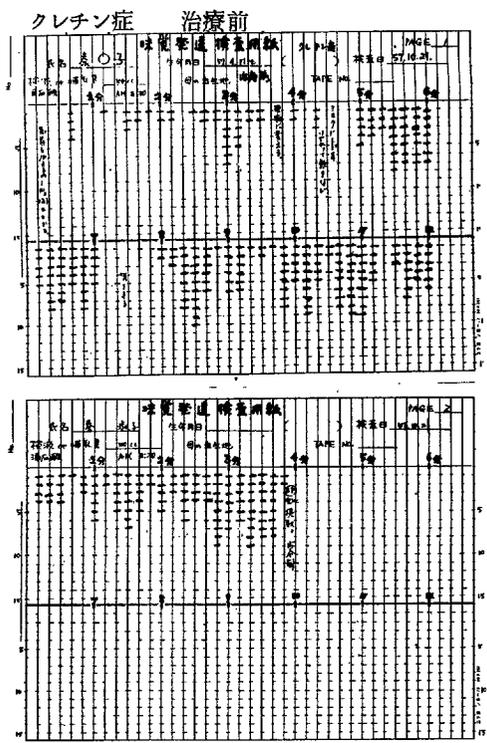


図1

藤 ベビー♀ 58. 1. 10日生 胎児栄養障害型SFD  
在胎37w 1930g

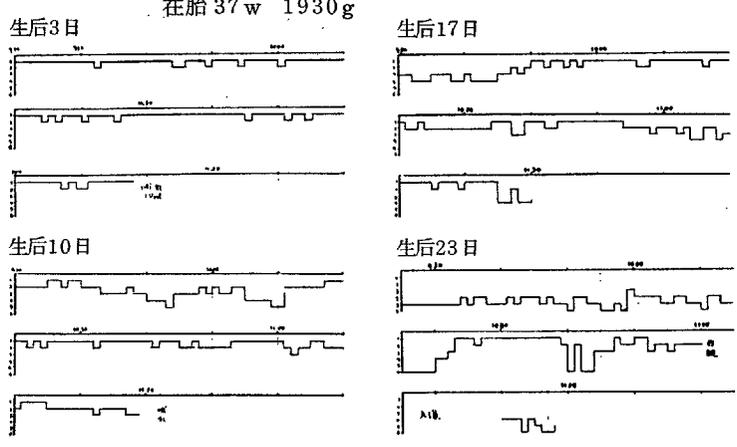
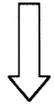
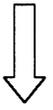


図2



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



#### 結 語

従来の新生児の神経学的診察に加え, state の観察, 哺乳リズム, 新生児行動の評価が脳機能不全の診断に有用であることが判明した。今後この方法を更に簡便化, 実用化することにより, 脳障害児の早期診断がより容易におこなわれると考えられる。